

令和8年度青森県立保健大学

一般選抜前期日程

社会福祉学科

# 小論文試験問題

10:00～11:30 (90分)

〈注意事項〉

- 1 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないでください。
- 2 この問題冊子には、問題用紙が4ページあります。
- 3 落丁・乱丁がある場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。
- 4 解答用紙には、下記の記入例により **あなたの名字の頭2文字及び受験番号を忘れず**に記入してください。
- 5 問題冊子及び下書用紙は持ち帰ってください。

〈解答用紙への記入例〉

(例1)

頭2文字	ス	ズ	(鈴木:スズキ)
------	---	---	----------

(例2)

頭2文字	ザ	イ	(財前:ザイゼン)
------	---	---	-----------

(例3)

頭2文字	キ	ツ	(吉川:キツカワ)
------	---	---	-----------

受験番号	3	1	1	0	0	1
------	---	---	---	---	---	---

## 令和8年度青森県立保健大学一般選抜前期日程 小論文試験問題

### 社会福祉学科

問題 次の文章は、14歳のときに約3週間の昏睡状態後、四肢マヒ、発話障がい等の後遺症が残った天畠大輔氏が書いたものである。この文章を読んで、後の問に答えなさい。（\*には注釈があります。）

#### 個人モデルから社会モデルへ

みなさんは、「個人モデル」や「社会モデル」という言葉を聞いたことがありますか？（中略）それぞれ、障がいのとらえ方に対する考え方を意味しており、個人モデルとは、障がいはその障がい当事者の皮膚の内側にあり、その当事者が努力したり、治療・リハビリによって治すべきもの、ととらえる考え方です。

社会モデルとはその逆で、障がいは当事者の皮膚の外側にあるもので、当事者が感じる不便や生きにくさは、多数派である「健常者」向けにしか設計されていない社会の側に責任があるとする考え方を指します。

（中略）僕の家の近くのファストフード店では階段をおりられない人に対して、階下のカウンターまで行かなくとも、インターホンで買い物ができるような仕組みがつくられています。社会モデルでは、こうした配慮はふつうになされるべきものだと考えられているのです。

僕はずっと「歩けない自分を変えるのが先だ」と思っていました。そこに階段しかないのであれば、自分の身体をなんとか今の社会に合わせるのが近道だという考えだったのです。個人モデルの考え方のなかで、自分を変えようともがき、結果が出ずに苦しむという繰り返しでした。

しかし、大学や大学院へ行き、介助制度を利用しながら試行錯誤をし、いろいろなことに挑戦していくなかで、社会モデルの考え方を知り、徐々に自分の障がいのとらえ方が変わっていったのです。そして僕が心の底から社会モデルの考え方になったのは2017年の春、自分で事業所を立ち上げる少し前、都立神経病院での検査入院が転機でした。

その入院は、僕がずっと一縷の望み<sup>いちろ</sup>と思っていた、脳に直接電極を刺すという手術が可能かどうかを検査するためのものでした。もしもその手術が可能と判断されたら、身体の緊張によって生じる呼吸困難の症状が治るかもしれないと、医師から言われていたのです。僕は心のどこかでずっと、この身体が少しでもよくなり、障がいが軽くなることを期待していました。でも、検査入院の結果は、「手術は大変むずかしく、成功の可能性はきわめて低い。さらに手術をすれば命の保証はない」というものでした。

僕はそのとき、もう個人モデルにしがみついて生きるのはやめようと、ようやく本心から思うことができたのです。それまでは身体を治すためにできる努力はなんでもする、という思いでした。（中略）

障がいを治さなくても自分の意志でしっかり生きていく方法、自分の目標に向かって前進していく方法はあると思いました。それが社会モデルの考え方でした。重い障がいを取り除かなくても、できない部分は介助者に補ってもらえばよい。そうやって、誰かに管理されることなく、みんなと同じように、自由に生きていこうと決意したのです。

博論\*でも、自分一人の能力や努力によってではなく、誰かの影響を受けながら、誰かの力を借りながら生産物をつくり上げること（僕の場合は介助者と協働して論文を書き上げる）の価値の見直しについて論じました。

能力は、決して一人の人間の内側にあるだけではありません。それを他者との関係のなかでどう発揮できるか、そうした関係性のうえに存在する能力も間違いなくあるのです。僕は介助者と協働で論文を書きながら、「自分の本質的な能力とはなんだろう……」「介助者ありきで書き上げる論文では、僕の能力は普遍的であるといえないのではないか……」という問いに繰り返し<sup>さいな</sup>苛まれました。

その僕にとって、こうした能力の社会モデル化という考え方は、その問いに対する1つの答えでした。僕は個人モデルから社会モデルの考え方に移行することで、自分の生きづらさが緩和されていくことを感じていたのです。

### 「能力」という個人モデルを捨てきれず

しかし僕は、社会モデルへの考えを深める過程で、逆に①自分が個人モデルから完全に自由になることはできないことも再認識しました。

僕は博論で、介助者との協働によって論文を書くことについて肯定的に論じた、と書きましたが、そもそも僕の大学院進学<sup>進学</sup>の動機は「もっと誰かに称賛されたい」「もっと目立ちたい」という思いでした。そして、その称賛は、「僕一人」に向けられるものであってほしかった、というのが紛れもない本音です。高等教育の研究者である山崎博敏氏が述べるように、人文社会系の博論は単著\*であることが原則で、学位\*が与えられるのも当然その一人になります。そのため、博論を完成させることができれば、それは「天島大輔」によって書かれた論文であり、この論文の真の著者は僕であると主張しやすいく考えたのです。その意味で博論は、僕の承認欲求を満たすにはうってつけのものでした。

しかしその意図とは裏腹に、論文執筆の実態は、僕の考えを表出する段階でさまざまな介助者がかかわりながら書き上げるというものでした。このような論文執筆過程は、承認欲求を満たすための「<sup>もろは</sup>諸刃の剣<sup>つるぎ</sup>」です。介助者の存在は、僕の考えを整理し、表出するうえで不可欠なものですが、一方では僕の発信を“水増し”する存在でもあり、僕一人への称賛には至らないという危険性もありました。

この不安感が僕の承認欲求をさらに高め、また介助者への「依存」が深まっていきました。どうしたら、自分の能力を世間に認めてもらえるか、まだまだ努力が足りない、もっともっと頑張らなくては……、といった具合です。

介助者による先読み\*について少し補足すると、もちろん文章作成全体において介助者の先読みありきで進んでいるわけではありません。僕が一文字一文字、時間をかけて綴ること、その僕の言葉を介助者がどんどん蓄積することで先読みが可能になります。その一文字一文字を伝えることと、先読みの組み合わせのうえに、僕の論文執筆は成り立っています。

介助者の先読みによって文章を紡ぐことは、決して楽なものではなく、それを受け入れることもまた、当事者側に痛みを伴います。自分の考えに、他者の<sup>しんじよく</sup>侵蝕を許すことでもあるからです。

それでも僕には先読みを排除する選択肢はありませんでした。自分で確実に言葉を紡

ぐのはあまりにも時間がかかりすぎて、発話可能なことが前提の社会のスピードにとうてい追いつかないからです。しかし、他者の先読みを用いたコミュニケーション方法では、当然のことですが、その他者の力量・能力に、スムーズさや文章の質が大きく左右されます。

僕は介助者をリクルートする時点でも、ある程度文章作成能力にすぐれた人材を意識的に集めていくようになりました。能力主義（その人の能力でその人の価値が決まる考え方）に翻弄されながら、僕は能力主義からは逃げられないことも同時に知りました。このように、僕は障がいの社会モデルを持っている一方で、能力面においては、個人モデルとして評価されたい自分の欲求も強く自覚することとなったのです。

### 上野千鶴子教授との出会い

そんな折に出会ったのは、女性学のパイオニア、上野千鶴子教授でした。当時上野先生は、僕のいた立命館大学大学院に特別招聘教授として着任されており、僕は上野ゼミに在籍していました。当初、僕は介助者の専門性にフォーカスして研究することを考えていましたが、上野先生から「個人的なことを徹底的に深掘りしなさい」と言われました。そこで先生から教えていただいた言葉は、フェミニズム運動で用いられた「②個人的なことは政治的なこと」というものです。（中略）

上野先生からの教えをきっかけに、フェミニズム運動と僕の生きづらさの共通点として、「依存」というキーワードがあることに気がつきました。フェミニズム運動は、男性に心理的、経済的に「依存」することを女性に強要するような社会システムに抗議し、そこからの脱却をめざして展開されてきた社会運動です。

（中略）

### 「依存」しなければ生きられない

僕は、「依存」をなくすことを目標にしているわけではありません。なぜなら、ひとつは社会的に弱い立場にあると特定の誰かに「依存」しなくては生きていけない現実があること、さらにいうと、実は誰もが何かしら、物や人に「依存」しながら生きているからです。

自身が脳性マヒ当事者であり、医師であり、研究者でもある熊谷晋一郎氏は、「健常者」と障がい者の違いは「依存」できるものの数の違いである、と主張しています。たとえば、車いすに乗る障がい者の場合、エレベーターがなければ二階に上がることはできませんが（エレベーターにのみ強く「依存」している状態）、「健常者」の場合はエレベーターだけでなく階段やエスカレーターなど、「依存」できるものの数が多く、それ自体を意識せずとも生活が成り立ちます。熊谷氏は障がい者の自立について「依存先の分散が必要」と表現しています。

僕もその主張に賛同しています。自立とは決して「依存しないこと」ではなく、頼れる先をたくさん持っていることだと考えているからです。ただ、熊谷氏のいう「依存先の分散」と僕の考えでは、異なることが一つだけあります。それは、僕のような「発話困難な重度身体障がい者」の場合、③「キーパーソン」といえる特定の他者が必要という点です。

(出典：天島大輔『〈弱さ〉を〈強み〉に』，岩波書店，2021年，p.188-200より抜粋。ただし，出題の都合上，縦書きの原文を横書きにし，文章の一部を省略・改変している。)

- \* 博論 博士論文。大学院で「博士号」を取得するために書く，高度な研究成果をまとめた論文。
- \* 単著 一人の筆者によって書かれた著作のこと。
- \* 学位 大学や大学院で特定の学問分野を修了したことを証明する称号。
- \* 先読み 言語障害がある人のコミュニケーションをスムーズにするために，相手が言おうとしている内容を予測して提示する支援方法。

問1 筆者が下線部①のように考える理由について，本文中の言葉を用いながら 40 字以上 60 字以内で説明しなさい。

問2 下線部②は具体的にどういうことか。本文の内容を踏まえ，あなたの言葉で 25 字以上 40 字以内で説明しなさい。

問3 筆者が下線部③と考える理由は何か。本文の内容を踏まえ，120 字以上 150 字以内で説明しなさい。

問4 障がい者が自分の意志でしっかり生きていく方法について，「個人モデル」「社会モデル」「依存」という言葉を用いながら，あなたの考えを具体的に 600 字以上 800 字以内で述べなさい。